

ますが、出口氏の他界は残念でなりません。

出口為治郎氏の遺稿を抜粋申し上げて、御他界を悼み、供養、回向の気持ちを捧げるものです。

(和歌山県 橋本 義治)

私の抑留記

島根県 田中勘助

一、満州国へ渡満

私は、山の中の平和な農村だった島根県の田所村に農家の長男として生を受けた。大正十二年十月三日、関東地震の直後である。尋常高等小学校を卒業するまで両親のもとで順調に生育して来た。しかし学校を卒業する頃から世の中は怪しくなっていたのである。父が農林学校に行くかと言うが、農業は嫌だし、家の方もあまり裕福でもないので断り、祖父のすすめた役場の小使として就職。その頃からよく召集令状の赤紙が来るようになった。

役場勤めは嫌いだった。都会に出てみたかった。密かに想いを寄せていた彼女が満州に行ったと聞いた。当時は満州国を理想の地として盛んに宣伝していたので自分も憧れてしまっていた。両親が世話していた近所の叔母さんが満州にいたので手紙を書いてみた。何と書いたか忘れたが、多分行きたいとでも書いたのだろう。折り返し主人の名刺「協和会職員」を入れて「協会に就職出来るから来ないか」と返事が来た。最初父は反対していたが、「行ってみるか」と、自分で世話した人切な子牛を売った代金で旅費を出して、縁故者である大屋さんという島根開拓団の団長さんがたまたま奥さんを迎えに帰られたと聞き、連れて行ってくれるように頼んでくれた。そして広島駅まで送ってくれた。本当に済まないことをしたものだ。ホームまで出て、乗車し窓からのぞく自分の所に来て、発車ベルが鳴り始めると「困ったらいつでも帰ってこい、悪いことはするなよ」と言う。熱いものがこみあがってきて、ワッと泣いてしまったが、父こそさぞ切ない気分だったろう。生涯忘れることのない思い出だった。

関釜連絡船に乗る。まわりの人達が皆希望に満ちているように思われた。大屋さんの奥さんが車酔いされて、平壤駅で下車して休まれることになった。自分はこれから乗換えもなく先方に到着列車も言っているで、別れて一人で行くことにした。ところが国境新義門での検閲が厳しかった。若僧が一人で、しかも二等車の寝台車だ。「どこまで行く、お金持っているか」とうるさい。当惑していると車掌さんが来て「この方は連れの方が平壤で下車されて」と説明してくれたので釈放された。多分大屋さんがチップでも出して頼んでいてくださったのだろうと感謝した。

目的の四平街駅に着く。迎えに出ていてもらっている。馬車や自転車風の人力車が沢山いる。衣服の違う満人達、とうとう満州に来たと緊張もするが、日本人が多いので安心した。

二、満州での生活、そして入宮

四平街に来たのが十五年九月半ば、就職するまでですることもないので毎日図書館通いをしていた。そして十月になって突然祖父が亡くなったとの連絡があった。

全く予測していないことであった。出る時は元氣だったので信じられない。どうしたのか詳しいことは解らないが、渡満直後だったので、帰らなくてもよいとのことだった。帰りたくても帰れない。

「協和会への就職は遅くなりそうなので、満鉄が今募集しているのでよかったら試験を受けてみるか」と言われ、新京に受験に行き、採用されて駅手として楊木林駅に勤務することになった。先輩に日高さんという同郷の人がいて、色々面倒を見てもらい、それに駅長さんがとてもよい人であり、すぐ馴れてきた。楊木林は小さい駅だが、地形がノモンハンによく似ていて、軍の演習地で戦車部隊もあると聞いたが、見たことはなかった。半年くらいして鞍山にある昭和製鋼所の近くに靈山駅という専用の貨物車を組成編成する大規模の構内駅が出来た。駅長が「君の将来のためによかったら行かないか」と言われて転動した。

機関区もあり、列車区もあり、若い人がたくさん来ていた。寮生活で、隣の立山駅に青年学校があり通学したが、学問より軍事訓練がほとんどだった。満州は

物資は豊富で映画館もあり、休みの日は青春を味わうことが出来た。自分の願っていた向学心はむなしく徴兵検査を受ける時が来た。甲種合格である。ほとんどの人がそうだった。防空兵だった。入隊は十九年一月。最後になるかも知れないので両親に会いに帰ってこようと十八年の暮れに帰宅した。後で聞いたのであるが、関釜連絡船が魚雷攻撃で沈没した当日で、釜山行がやられたのである。全くの命拾いをしたようだ。

十八年は大水害の年だった。島根の右見地方は大被害を受けていた。途中浜田から家まで歩くことになった。散々である。家では入営だということで歓迎、歓送である。何が喜びなのか、お別れの式ではないか。でも女々しいことは禁物である。そして今度は弟が広島まで送ってくれた。事件以後の乗船は厳しくなっていて、なかなか切符が求められない。改札窓口にいた憲兵に入営の札を見せて切符を買った。救命具を着けた窮屈な船旅だった。霊山駅からの入営者は十人くらいだったと思う。機関区、列車区とも一緒である。そして記念写真を撮る。十九年一月いよいよ入営の時が来

た。わずかな身の回り品を荷造りして家に送る。布団くらいのものだけだ。

三、軍隊へ入隊

自分の入隊先は虎頭の守備隊である。広場に集合して、各隊から出迎えに来ている。将校の所に名前を呼ばれて行く。藤岡中隊だったか、高射砲隊である。しばらく教育されてから衛兵に出る。国境陣地からソ連側を望遠鏡で監視するのである。向こうにも展望台があつてソ連兵の姿が見える。女性もいた。古年兵から虎頭陣地の話も聞く。すばらしい陣地のようである。向こうに見える丘の下に地下要塞があつて、司令部が全部中に入れると言っていた。その守備隊も半年ぐらいで編成替えになり、野機砲七〇中隊で奥村正三郎中尉の指揮下になり、昭和製鋼所の警備だと、懐かしい鞍山市に帰りビルの屋上に陣地を作ったが、初年兵がほとんどの中隊だった。なんでも虎頭にいた古年兵連は大部分が南方戦線に移動したと聞いた。高射砲も模型を置いてカモフラージュしたとか。これではソ連参戦の時どうしようもなかったことだろう。鞍山にもB

29の攻撃が始まった。編隊を組んでの大きな爆撃機、高度四千メートルくらいかと思つた。自分は観測ゆゑ測遠器を向けるとなんと一万メートル以上、一瞬目を疑つたが、確かに高度一万以上だ。高射砲でもやつと、機関砲ではなす術がない。呆然と見ているだけ、情ないこと。

内地から初年兵がやってきた。帯剣がない、雑囊と竹の水筒だけ持ってくる。物資不足が深刻と思われてくる。憲兵の募集があると聞き志願してみる。内務曹長に呼ばれた。「何故憲兵なんかになる、それより下士候になれ」と受け付けない。あくまで憲兵志願をすると、「よし帰れ」とそのまま試験に出してくれない、そして勝手に下士官候補者にしてしまふ。悔しかったが仕方がない。大竹一等兵と二人、中隊から行くことになつた。急に奥村中隊はダムの警備で移動することになり、教育に出る二人は司令部へ預けられる。二野高司令官津田少将閣下に申告に行った。ずいぶん緊張したものだ。

司令部ではすることがない。毎日大竹と将校の三食

の配膳をすることになる。並べる順番を間違わないようにと注意される。将校の名前を覚えるのに苦労する。やがて各隊から志願兵が集まり教育班が出来る。教官二人、中尉と少尉、班長は、軍曹と伍長の二人、そして班付兵長一人。なかなか内務が厳しい。そのうちに班の隣に現地召集の下士官ばかりの班が出来た。再教育なのか、夜、酒等持ち込んでのんびりしていた。我々の知らぬままに時局は変わっていた。班長の塩谷軍曹が古いラジオを持って来てテーブルの上に置き「これから重大放送があるので、皆集まれ」という。一体何事だろうかと「ガーガー」と雑音の入るラジオを見つめていた。天皇陛下の玉音が聞こえて来たが、なかなか聞き取れない。どうやら戦争終結のようだがハッキリ解らない。班長が命令受領だと出て行く。しばらくして「関東軍はあくまで最後まで戦う」とか「囚人の脱走あり警戒せよ」など聞いてきた。皆動揺しているようであった。

そうしているうちに「ソ連が参戦してきたが、終戦になつたので全員武装解除する」ということになり、

あまり武器のない自分達の方も班長がトラックに積んでどこかに持って行った。そして全員集結するのだと皇姑屯に移動することになった。途中現地解除の下士官一人送って行くことになり、同僚の新津兵長と二人遅れて先行の部隊を追って行き、奉天の広い道路の向う側を見ると、高射砲のような長い砲身をつけた戦車がずらりと並んでいた。周りにポロポロの服を着た大男たちがいる。あれがソ連兵かと気持ちが悪い。だが戦争はしてないのだからと通過すると後ろで人声が聞こえたが、知らぬ顔で急いだ。部隊に追いつくと、全員止められて時計等持ち物をずいぶん略奪されたとのことだった。集結した部隊は、糧秣を貯えながらしばらく待機していた。これからどうなるのか。「戦争は終わった、早く内地へ帰りたい」という安堵感や不安感が入り乱れて数日を過ごすことになった。

四、シベリア輸送

今までの部隊の編成替えがあると各隊集合する。内地へ帰る列車に乗車するための編成だと聞く。山口少佐を大隊長に約千人ぐらいたったようだ。内地へ帰れ

ると心は有頂天である。通達があり「これから帰国するが、南大連経由では中国軍がいるので、日本政府の要請でソ連の庇護のもとにソ連領を通りウラジオストクから帰る」と、騙される一步とも知らずに皆喜々として乗車した。

列車が止まった。昔いた楊木林駅である。懐かしかった。いたいた、昔の仲間の駅員ヤンである。彼も私を見つけてくれて「田中」と側に寄って来てくれた。そして小声で「モスコイに行くのだ、降りなさい」という。「違う、帰国するのだ」と否定して、他の人のことを聞きたかったが時間がなく、監視の目もある。互いに身体に気を付けてと別れた。対向列車が来た。有蓋貨物車に人がいっぱい乗っていたようだった。

次に停車したのが哈爾濱駅である。中ホームに上って駅側ホームを見ると、ポロポロになった衣服を身に着けて子供を背負ったりした婦人達がたくさん見えた。どうするのだろうと思っていると、ワーツと一カ所に駆け寄る。見ると、誰か立ち売りから買った饅頭を投げたのだろう、皆空腹のようだった。つられて、誰も

が買えるだけ立ち売りから買って投げ出した。必死で拾おうとしている姿を見て涙が出てくる。なんとか出来ないものかと敗戦の悲哀が身にしみてくる。次に停車したところは知らない所、駐車のようなだ。各隊から使役を出せという。ソ連兵の警備兵が付いて元官舎だったような所に連れて行く。中に乾草等一杯散らかっている。よく見ると壁や戸に弾痕がある。中を片づけて掃除をさせられる。ここにいた人達はどうなったのだろうかと胸が熱くなる。しばらく駐車していた。そして着いたのが黒河だったので、ソ満国境である。全員下車する。また作業である。糧秣か何か、大きな袋をかつがせて運搬させる。ソ連人らしいのが「ダバ イダバイ、イジシユダー」などとわめくが、言葉が解らない。早く早くと言っているのだろうか、全くいまいまいしかった。

今度は貨物車だ。有蓋車の中を上下二段に仕切って休めるようにしてあり、七十人ぐらいずつ乗る。帰るまでガマンだ、ガマンだとあきらめて横になる。一夜明けて翌朝「太陽が後方に見える、変だなあ」とい

う声をする。それでは西に向かって走っている、逆コースではないか。不安になり皆騒ぎだした。広い野原のような所に止まった。食事受領と排便をしろというが便所なんか無い。あちこちに屈み込む。するとどこから出てきたのかソ連の子供が寄ってくる、そして話しかける。言葉が解らないのでウンウンとあいづちを打っている、急に万年筆やバンドに手を掛けて抜いて行く。コラツと言っても脱いだズボンが邪魔になり追いかけれない、相当被害者がいた。それから度々窃盗団に出会った。ソ連は盗人の国なのかと思った。やがてそんな疑問を察してか、説明を聞かされた。「今日本の国内は敗戦で混乱していて食糧難であり、我が全員一度に帰国しても困るので、日本政府の依頼で二、三カ月ソ連に滞在して順次帰国することになった。生活のために多少の労作業もするようだ」と。やはり西に向かっていたのか、一体どこまで行くのだろうか、シベリアは広いからと不安になる。毎日毎日内地のことを想像したり、疑問の連続である。

十一月の初め、やっと着いたらしいがどこか解らぬ。

今度は行軍である。皆荷物を持ってトポトボと歩き出した。もうなるようにしかならない。寒くなってきた、白いものがチラホラ降って来た。遠い。やがて日も暮れ出てきた。皆疲れたようだ。やっとラーゲリらしい白い建物が見える。あそこらしい、ホッとした。元四人の収容所だったようだ。塙壁の四角に高い監視塔が見える。ラーゲリの中の建物にそれぞれ分配されて入った。

五、ラーゲリでの生活

建物の中の奥に鉄パイプのベッドが積んである。部屋を掃除してベッドを並べる。疲れた身体をベッドに横にしたのは夜中も大分遅くなってから。しばらくしたら身体がかゆくてたまらない。誰も同じらしい。灯がついた、見ると、いるわいるわ、南京虫が壁をウヨウヨしている。とても寝たものではない。自分は初めて南京虫を見た。肌に二カ所ずつ噛み跡が残っている。大騒動である。ベッドを壁から離して、空缶をベッドの足に敷く者等、各人対策を考えている。

落ち着いたと思ったら、作業に行くのだと厚い二本

指の手袋を渡されて門を出た。外は寒い。石山に連れていかれる。玄翁げんのおうと鉄棒を持って大きな石を小さく割る仕事、なかなか割れない。叩く場所が悪いと幾ら叩いても石は割れない。鉄棒も同じである。よい割れ目を見て突かないと駄目である。手袋がすぐ破れる。鉄棒に生身が当たったら大変、くっついてしまう。零下何十度なのだろうか。ラーゲリに帰ったら手袋の修理、そして腹が空くので食べ物のお話ばかり。ポタ餅が食べたい、いつまでこんなことをするのか、一人ではとても耐えられなかったろう。大勢だから凌げたと思う。

二、三日して、今日から街の工場の仕事に出るのだと、各小隊毎に門前に並び、ラーゲリの看守と外の歩哨部隊から派遣された警戒兵との間で員数引渡しをする。五列に並び替えてなかなか手間取る。四列では掌握出来ないらしい、驚いた。腕時計を取り上げて、ネジが切れたら故障と思っている兵のいることは聞いていた。行列の前後に警戒兵がついて行く。各小隊毎に作業場所は違っていったようだ。街の名はサマルカンドと聞く。シルクロードで知った名前、遠い所に来た

ものだ。

色々な建物を建設中のようなだった。我々の作業は穴掘りだった。基礎作りらしいが、冬は寒くて固く凍った土は岩盤のようである。鉄の矢をハンマーで打ち込んで掘るのだ。力が要る、腹が空く。昼だというのになかなか食事にならない。ようやく食事が来たとき食堂前に並び、そして渡されたのが薄い小さな黒パンと、これもまた薄いハムのようなもの一切れ、一口でなくなる。呆然とする。とても仕事する気になれない。小隊長は秋田見習士官だったが、彼も怒ってストライキだと道具を投げ出して、寒いので体操を始める。現場監督らしいノッポの男が「ニエラポーター」とやってくる。言葉は通じないが多少解るらしい。小隊長とやり合っている。「何故働かぬ」「食事がないので働けない」「ソ連はノルマがないと食事が無い」「ヤポンは食べないと働けない」と片言で身ぶり手ぶりを加えて言っている。監督もあきらめたか、ブツブツ怒っていたが行ってしまう。

警戒兵も工場に着いたらどこかに行ってしまう。工

場内では責任はないらしい。道中だけが任務のようだ。それからあまり作業せず、時間が来たのか警戒兵が迎えに来て帰る。ノルマというのはその時に知った。穴掘りはなかなかノルマの上がらない作業だ。翌日から昼食はラーゲルから持参したが、三〇〇グラムぐらいの黒パン一個だけだ。仕事は、帰る時鉄棒を打ち込み電流を通して置くと翌日は土もやわらかくなっているので多少はかどりだした。二、三カ月後ということだった帰国の話もない。ダモイは八月に延期になったらという話が出てきた。「どこかの下士官が脱走してつかまったらしい」、また「衛生兵長が自殺したそうだ」とも聞いた。先行き悲観してのことだったろうと思う。少し早まったなという気もしたが、誰も一時はそういう気持ちになったこともあるだろう。ともかく腹がへる。収容所の土の屋根の上にアカザが生えているのを見て、食べられるというので探って飯盒で煮て食べたが、うまかった。中には変な雑草を食べて気が狂った者もいる。気狂草というのだそうだが、毒草で死ななくてよかった。浣腸して治ったと聞いた。

仕事先で物々交換が盛んになった。一般のソ連労働者も相当物資不足に困っていたようだ。特にマダム達だが、監視の日を盗んでは黒パンを見せて何か出せという。確かに来る時各自、石けん、靴下、着替えのシャツ等持てるだけ持って来ている。ヤポンスキーは物持ちと思つたようだ。我々が来る前、ボロボロの服を着た乞食のような捕虜が来ると聞いていたそうだ。しかし立派な衣服を着けているので驚いたらしい。それもだんだんなくなつて本当に乞食になつた。困つたのが捕虜を預かるラーゲリの責任者のようだ。被服係がいて、縫製作業所を置きミシンや靴修理の職人を集めて修理をしていたが、こうなくなつては補給がつかなくなる。所持名簿を作ることになつたらしい。日本側の被服係は島中曹長という京都出身の人だつた。ソ連側はダベダベッチというユダヤ人だつたが、なぜか私はその島中さんの助手にと呼ばれたので驚いた。前に司令部の人事をしていた中島准尉の世話でそうなつたかと思つたが解らない。名簿作り、日本名をロシア語で書き、員数をつける簡単な仕事であるが、ラーゲリの

外にある所長達の事務所の中の片隅の机の上でやるのには参つた。サボることは出来ない。一人で話相手もない、気づかいても疲れる。形式的なものだが終つてホツとした。それから島中さんのもとで縫製の手伝いや雑役をすることになつた。

ダベダベッチに連れられてカラガンダに被服の受領にも行つた。倉庫にドイツ人の捕虜がいた。彼等はロシア語は堪能である。同じ捕虜の日本人である自分に親しみを感じてくれるようだつた。被服といつても下駄靴、木の板に靴のように布で編み上げをつけたもの。誰が考えたか、日本人にはとてもはきづらいものだ。その裏の底に、古タイヤを暖めてはがし内側のゴムを取り除いた部分を切つて打ちつけるのが靴職人達の仕事。はいてきた皮の編み上げ靴は殆ど修理不能になつてきていた。時にはソ連将校に頼まれて立派な革靴も作つていた。さすが職人だ。その修理には、使う古タイヤがなくて工場の外に積んであつた新品のタイヤを盗ませて使用させたのにもビックリ、日本人には考えられない。自分の職務を果たすのが第一らしい。

抑留も三年目、冬の夜中に叩き起こされて、前も見えない吹雪の中、厚い氷の河を渡り駅に直行して貨車のコークス下ろしをすることなどもなくなってきた。食事も多少よくなり、ノルマのよい者は給料も出たようだ。ともかく技術者は、溶接工、旋盤工などとても待遇がよかつたらしい。プラスチックができた。ギター、バイオリン等自前で作つたらしい。器用な人もいるが、作業に余裕も出てきたようである。演劇する人もいる。広島出身の能美という歌の上手なのがいた。音痴である自分もレッスンをしてもらつた。どうやって衣裳を工夫したのか、かつらを作り女形を演じて芝居をして一同を楽しませてくれる人達もいた。また、入れ歯が割れて針金でつないでいる人がいた。大変だつたらう。誰もがなんとか元気で内地へ帰るまで生き延びようと思つて必死である。

六、民主運動

民主委員長ができた。民主運動が始まつたのだ。格別将校と兵のいざこざは聞かなかつた。副官の高橋大尉は鼻髭をのばしていたが、部下思ひの優しい人だつ

た。カラガンダからアクチーブとか教育を受けて帰つて来たという二人がいた。熱心に運動をしているようであつた。壁新聞もできる。うまい漫画の絵が描いてある。日本新聞がくる。活字の印刷物を見るのは久しぶりだ。渴えたように読むが、内地の欠乏状況や資本・軍国主義打倒の記事ばかり、ダモイの様子は読みとれない。ラーゲリ内から二十八人くらい集めて教育が始まつた。ラポートはなく、毎日講義を受けては意見発表をするのである。ボルシェヴィキというソ連の革命史を読むようにと渡されるが、興味を持って読んだが共産主義がよいと思わなかつた。

工場の作業に行っている時、食堂で昔の学校の時の同級生である小笠原君に会つた。全く驚いた。彼は内地での入隊、自分は満州での現地入隊である。部隊編成が違う。予想だにしないことだつた。聞けばカラガンダのラーゲリからこちらのラーゲリに来たそうだ。彼の部隊は北支から満州に入り抑留されたらしい。鳥根の人も大分いるようで嬉しく心強く思ったが、作業場が違うのでなかなか話せる機会もなかつた。そのう

ち病弱者や高齢者から帰国しているということを知りたが、真実のほどは解らない。

八月中旬だったか、突然半数ぐらいにダモイだという。急なことである。全員ではなく半分とは。自分は帰れるのだろうかと気もそぞろである。名前の発表があり、帰れる方だ。複雑な気持ちだ。嬉しいけれど、残る者の気持ちを思うと喜んでばかりはいられない。名前のなかった者に「君達もすぐ帰れるのだから」と慰めながら、すまないような思いをしながら住所を聞いて、家族の人に伝えとくからなと別れる。

一車両に五十人くらいずつ乗る。お前はこと配分されて乗車する。と、見送りに来ていた委員長に突然「君がこの車両のアギタートルだ」と言われビックリしたが、嫌とは言えない。「ハイ」と返事をして乗り込む。急なことで、人選する間もなく委員長が独断したのである。帰る道中講義でもしろというのだが、自分にはそんな器量はない。帰ったら遊びに来てくれと、互いに昔の故郷を思い出して楽しく語り合う。ナホトカという港に着く。たくさん先の先着組がいる。盛

んに民主運動がされているようだった。吊るし上げもあるように聞く。ここまで来てなんでそんなことをするのかと思ったが、ソ連に対しては必要だったのかも知れない。今さらまた残されてもたまらない。ともかく乗船するまでは安心出来ないと思つた。

なかなか船が来ないらしい。一週間ぐらいはいたと思つう。やっと順番が来た。検閲を受けて棧橋を渡る時、永い間夢見たことが今現実になっているのだと思ひ涙ぐむが、あまり感情の高ぶりもなかった。自然に船底に入る。荒波なのか、横になった身体が転がる。船酔いに弱いので心配したが、帰れる嬉しさでか、大丈夫だった。

「島が見えるぞ」の声に甲板に出て見る。あれが内地かと思無量であった。身体にDDTを掛けられる、白い粉をポンプで吹き付ける、馴れてはいたが淋しい気持ちだった。

出迎えて並んでいる白衣の看護婦さん達を見て、皆美しく見える。そして元気そうである。頭にあった飢餓のイメージは吹き飛ぶ。安堵し勇気が出る。手当

金千円もらい、喜んで煙草を買いに行き、高いのに驚く。インフレなんか頭になかった。滞在中呼び出されて色々質問されていた人もいたが、自分はなかった。また小笠原君と一緒に帰り郷の列車に乗る。昔は運行していなかった国鉄バスも走っている。

戸惑いながら帰って来た二十三年九月十九日、ちょうど田所村の秋祭りであった。何か奇縁を感じる。田所駅から徒歩で一人で帰り、途中の坂の上に腰を下ろして休み、昔の感慨に浸っていると、近くの住職さんが自転車を通りかけたのを見る。「オー勘助さんか」と驚き、簡単な挨拶をしてあたふたと帰って行かれる。どうしてかと思ったが、自分が休んでいたのが具合でも悪いのかと家の方に通報してくれたらしい。暫くして立ち上がり帰りかけると、向こうから父や弟達が迎えに来てくれた。通知してないので帰ることを知らず、祭の日でもあるし格別喜んでくれた。つもる話はあるが、何よりも元気で帰って来たのが一番である。

兵器学校に行っていたらしい弟は帰還して家業を手伝っていたが、長男の自分が帰って来たからと警察を

志願して大阪に出て行った。自分が出たかったが、それも言えない。田舎にも復員した人達や若い人が増えていた。しかし誰も互いのつながりはなく、何をしようのか皆エネルギーをもてあましているように思えた。そこで会合を持ってみようと同覧文を出してお寺のお堂に集まるよう訴えると、予想以上に多くの人が集まったのには驚いた。当時4Hクラブがあちこちで結成されていた。自分達もやろうと「原風会」という会の名称ができた。そしてみんな農村で生きて行くべき道を色々模索しながら努力してきた。あの忌まわしいシベリアでの生活を振り切るようにと、誰に話しても解らないだろう、身を持って体験した者だけが解り得ることである。その後の日本の急転変貌について行くには戦前の教育を受けた者には大変である。自由民主主義は自分本位の我利我利亡者の大量生産となり、世界一の経済大国と言われているが世界一の心の貧乏大国になったのではあるまいか。最近の新聞、テレビでの事件は人間としての常識を逸脱するようなことばかりである。誰が悪いと決めつけることは出来まい。

皆一生懸命に生きてきたことだけは確かである。

今ここに自分の過去のつたない人生を綴ってみて、心肝恐懼であるが、今さらやり直すことも出来ない。

こんな生き方をした者もいたかと知っていたら、たぐいにくたぐいにあえて執筆した。

【執筆者の紹介】

執筆者は、島根県の中南部、広島県との県境の高原盆地にある邑智郡瑞穂町で、水稻、野菜を主体として農業を営んでいます。

私の学友であるとともに、軍隊に入隊、抑留生活を三年、同じ収容所で生活を共にし、帰国の折も行動を共にした戦友です。

(島根県 小笠原 義良之助)

黒パンとラーゲル

岡山県 横畑 友三郎

初年兵以来苦楽を分かち合い親しんだ第三飛行場中隊から、ただ一人第九十七飛行場大隊へ転属を命ぜられたのは昭和十九年一月八日であった。

第三飛行場中隊は佳木斯飛行場に展開中であつたが、依蘭及び長発屯に派遣隊も出ており、わずかな自動車班の戦友たちに見送られ佳木斯駅を出発したのは翌九日の早朝であつた。

当時九七飛行場は北安省嫩江飛行場に展開中で、着任後は大隊本部兵器委員室に勤務し、航空燃料係として日々精励していた。その間に、東軍司令部とか四平街にあつた野戦航空燃料廠等にも公務出張の経験に恵まれた。同年八月、補給中隊に配属替えとなり、終戦の日まで自動車班長として本来の特業に従事することになった。